



最強の異世界 やりすぎ旅行記 1

ALPHA POLIS

萩場ぬし
Hagiba Nusi

アルファライト文庫 

シ

アヤトを異世界に召喚した、
自称神様の真っ白な少年。

ミランダ・ワークラフト

王国最強の近衛騎士にして、
SSランクの冒険者。

ヘレナ

アヤトに従う竜人の少女。
匂いフェチの隠いアリ。

メア・ルーク・ワンド

ライナ王国国王の孫娘。
見た目は不良な引きこもり。

ノワール

『災厄の悪魔』と呼ばれる、
かつて世界を恐怖に陥れた悪魔。

ルピア

コノハ学園の学園長で、
元SSランク冒険者のロリ巨乳。

アヤト

本名、小鳥遊穂人。
元の世界で最強だからと
異世界に招待された青年。

ミーナ

荒野でアヤトと出会った、
寡黙な猫耳少女。

CHARACTERS

主な登場人物

第1話 神の招待

「……もう夕方か」

ぼーっとしていると窓から光が差し込み、顔を照らす。

俺、小鳥遊綾人は、実家にある道場で体を鍛えていた。

俺は小さい頃、体が貧弱だった。そのせいで、武術家であった爺さんが丈夫な体にするために鍛えると言いつ出し、同じく武術家である両親も了承して、物心ついた時からうちにある道場で鍛練を続けてきたのだ。

おかげで十八歳になった今では、健康どころか大の大人にも負けないほど丈夫になっていた。

そして今日も鍛練が終わったと、身支度のために立ち上がったその時――

「失礼する!」

突然の野太い声と共に、大柄の男を先頭にして何人もの暑苦しい男たちが道場に押し入ってきた。

「またか……」

俺は思わず溜息を吐いてしまった。

見たところ、おそらく一般人の道場破りだろう。

入って来た男たちの中でも特に大きな体をした男が、前に出て言った。

「小鳥遊宗次郎殿はいるか？」

男が口にした言葉に俺は、「やっぱり」と零してうんざりしてしまふ。

大柄な男が口にした宗次郎とは、俺の爺さんの名だ。

爺さんは武術の世界ではそれなりに有名らしく、こういう道場破りが頻繁にうちに来る。しかも狙ったかのように、爺さんがいない時に限つてだ。

「今爺さんは出掛ける、出直してくれ」

「『爺さん』ということとは、君はお孫さんかな？ 普通、歳上には敬語を使うものではないかね？」

俺は二度目の溜息を吐きながら答える。

「悪いが俺が下手に出てよかった試しがないもんでね。どうせあんたも、爺さんが来るまでの暇つぶしだのなんだの言つて俺と試合する気だったんだろ？ それに……人の家にズカズカ入って来た奴に対して払う敬意なんてあると思うか？」

そう、道場破りが来ると、こちらがどんな言動をとったとしても、何かしらの因縁を付けられてしまう。だから数年前からは、敬語など使わなくなっていた。

「……たしかに宗次郎殿がいなければ暇つぶしに、と思つていたが、少々気が変わったよ」

男が怒気を込めた声でそう言い、こちらを睨んでくる。

もうキレた……短気過ぎないか？

いくらなんでも大人気ない。そう思っていると、大柄の男が首をポキポキ鳴らして構えを取る。

ポクシングの構えにも似ているが違う。自己流か、もしくは素人か。少なくとも隙だらけなことは間違いない。

「手加減する気でいたが仕方がない、少し痛い目に遭つてもらおうか」

何を今更、元々弄ぶ気でいた癖に。

いつもそうだ、爺さんがいないなら弟子の俺を痛めつけようと考える輩ばかり。だがまあ、こいつ等もいつも通りに相手してやればいい。

俺は道場の真ん中へ移動し、男たちに向き直る。

「さて、それじゃあどっからでも掛かって来てくれ」

「……なんだと？」

突然の挑発的な言葉に、全員が戸惑いを見せたが、先程の男が口を開く。

「ルールは？」

「ない。強いて言うならなんでもありのルールだ。あんたら全員で来ても、武器を使うとも……何をしてくれても構わない」

「……誇りある武人として最低限のルールは守るが、後悔するなよ？」

バカにされたと思ったのか、男の体がプルプルと震えている。まあ、実際バカにしたのだが。

武人か……昔はどうか知らないが、この現代で誇りがどうのなんて言う奴は、大概口先だけだ。

こいつの場合、「後悔するな」とか言ってる時点ですでに守る気なんてさらさら無いんだらうな。

「喋ってないで早く来い。じゃないと爺さんが帰ってくる前に片付かんだらうが」
俺のその言葉が火種となり、大柄の男を含む全員が襲い掛かってきた。

十分後、男たちは結果的に屍の山と化していた。

俺はその上に座り、ひとりごちる。

「まあ、こんなもんだらうな」

面白味もない結果だったが、言っつてしまえばこいつらはただの一般人に過ぎない。

なので俺が手こずるほどの実力はなかったのだが、少し遊んで時間をかけてしまった。

「はっはっは！ こりやまた見事に積み上げたのうー」

その時、豪快な笑い声と共に老人が道場に現れた。

老人と言っても腰は曲がっておらず、白髪と白い髭以外は年齢より若く見える。そして

この老人こそこの道場の主であり、武術の達人であり、そして俺の祖父である爺さん、小鳥遊宗次郎である。

「おかえり、師匠」

俺が爺さんをそう呼ぶと、苦虫を噛み潰したような顔をされた。

「もう師匠なんぞと呼ばんでいいじゃろう。すでにお前の実力は僕よりも上なんじやから」

事実、数年前から始めた爺さんとの試合では、三年前は善戦するも敗北。二年前は僅差で勝利。そして去年の試合では圧勝してしまっていた。

「実力なんて関係無いだらうよ。爺さんは恩人なんだから」

恩人……そういうことになっている。

俺が今生きてるのは、たしかに爺さんや両親による恩恵がほとんどだ。

しかし、それに感謝してるかと言えば話が別になるわけで……

それでも、俺を生かすためにかなりの労力を割いてくれたことは感謝している。

「そう言ってくれるのはありがたいんじやが、何とものう……」

自身の髭を摩^さつて、なかなか納得してくれないご様子の爺さん。
俺は屍を階段のように踏みつけながら降りる。流石に本当に死んではいないので、一人から呻^{うめ}き声が聞こえるが気にしない。

「とりあえず俺はもう帰るから、その礼儀知らずな奴らの後始末よろしく」
俺は自分の後ろにある屍の山を親指で差して言った。

「お前が散らかしたんじゃろうが。師匠を、というか老人を旁^{たわ}ろうと思わんのか？」
さっきまで否定していた師匠呼びをここぞとばかりに使わないでくれ。

「いやいや、元々爺さん目当ての客なんだから爺さんが何とかしてくれよ」

俺はそれだけ言って、逃げるようにその場をあとにする。

が、少しだけ気になって、後ろの爺さんの様子をチラ見すると、困った顔をしているだろうと思っていたのに、なぜか満面の笑みを浮かべていた。

「気を付けてな！」

道場、もとい爺さんから逃げてきた俺は、自室のベッドにダイブし、軽く溜息を吐いた。
「せっかくの夏休みなのに、今日も相変わらずトラブルまみれ、っと」

道場破りは頻繁といっても毎日ではない。だがそれ以外にも、アクシデントやトラブルが毎日のように起こっていた。たとえば車にひかれそうになったり、道で喧嘩^{けんか}を売られた

りと様々だ。

そして時折、本気で死を覚悟するほどの何かが起きることもあった。それはさっきの道場破りなど比にならないくらいに危険なアクシデントだ。

「昔からだっただけど、何も起こらない日が一日もないな……というか爺さん、さっきなんであんなことを？ 同じ敷地内だろうに……」

「気を付けて」という意味深な言葉を気にしつつも、俺は瞼^{まぶた}を閉じる。今日はなぜか一段と眠い。

自室ほど安心する場所などなく、俺はそのまま意識を手放した。

それからどれだけ時間が経^たったか、辺りが明るくなるのを感じた。
眩^{まぶ}しい。なんだ、もう朝なのか？

……学校行く準備しないと。

そう思い、寝惚^{ねぼ}けながら周りにあるものを手で探^さった。

だがそこで気付く。何一つ触れないどころか、自分が寝ていた所がベッドでないことに。
一気に覚醒^{かくせい}して目を見開くと、そこには、壁^{かべ}も何もない真っ白な空間が広がっていた。

「……どこだ、ここっ？」

状況が呑み込めず、ようやく絞り出した第一声がそれだった。

俺は混乱しつつも、辺りを探る。

どこまで見ても真っ白な世界とか、まるで友人が読んでた漫画の死後の世界みたいな……

そして嫌な考えが頭をよぎる。

「まさか寝てる間に死んだのか!？」

飛び起きるように立ち上がり、急いで体を触る。

そんなことをしたところで死んでいるかなどわかるはずなのに。

「あつはつは！ 前々から面白いとは思ってたけど、本当に面白いね……君は」

「ッ!？」

子供のような声が後ろから聞こえ、素早く振り返った。

そこには、白髪天然パーマで身の丈に合っていないブカブカな白い服を着た、小学生くらいの身長的人物がいた。

「何」だ、お前?」

思わず言葉が漏れた。

いくら混乱していたとはいえ、起きてすぐに周りを確認し、気配も探った。

だがそれは、前触れもなく現れた。

今も目の前にいるはずなのに全く気配を感じず、ただの人形が立っているかのようだ。

武術の達人である俺が気付けなかったという現実には、全身から嫌な汗が噴き出す。

そんな俺へ、少年は笑いながら答える。

「僕はシト。『神様』だよ」

「……神、ねえ?」

さつきまで警戒していたのがバカバカしくなるような、突然のカミングアウト。宗教の勧誘か?

「やっぱり信じてない?」

「いや、存在するしないなんてどっちでもいいってだけで」

「そっか。まあいいさ、それよりも君に朗報があるんだけど」

「朗報?」と聞き返すと、シトはまるでダンスでも踊っているかのようにくるくると回り、笑顔と共にバツと両手を広げた。

「なんと！ 君に異世界へ行く権利を与えようと思います!」

その後、シトが口で「ドンドンパフパフ!」と言い、しばらくの沈黙が訪れる。

「……ん?」

異世……界?

話が唐突過ぎて、正直、神だと名乗られた時より混乱した。

「異世界だよ、異世界！ 剣だったり魔法だったり竜だったり！ ファンタジー満載の世

界さー！ どうする？ 行く？ それとも怪しいから行って行かない？ 僕の意見としては行った方が――」

「待て待て待て！ ちょっと落ち着け！」

「どんだん話を進めようとするシトを手で制する。」

「まず、なんで俺なんだ？ それに突然消えたら家族が心配するだろ？」

「ではその疑問に答えてあげよう！ まず『なぜ君を選んだか』。それは君があの世界で一番強いからだよ」

強さ？ それだけ？ いや、それよりも……俺が世界で一番？

「まあ、もちろんそれだけじゃないけど。君みたいな強さの人を、僕の世界に招待したいのさ！ ちなみになんで強い人を招待したいかなんてのに、たいした理由はないよ。強いて言えば、そういう人を僕の世界に放り込んだらどうなっちゃうか気になる、ってところかな？」

「なんじゃそりや……それなら俺じゃなくてもいいだろ？ とうるか俺が世界一はありえない。世界は広いし、俺たち以外にも達人はいるはずだ。たしかに爺さんには勝てるようになったけど」

「それだよ。小鳥遊宗次郎……彼は少し前までは世界一の強さだったんだ。それに君は勝った。つまり、君が世界一ということになる」

待て……爺さんが世界一？ たしかに有名ではあったかもしれないがそれにしても……

俺の反応がよほど面白かったのか、シトはニヤリと笑って話を進めた。

「それとさつきも言ったけど、理由はそれだけじゃない。もう一つの理由は……君が『神の加護』と『悪魔の呪い』、本来相容れないはずの二つの特性を持っているからさ！」

「……はい？」

これまでで一番理解できない単語を聞いた気がする。

「神の加護」？ 「悪魔の呪い」？

俺がそんなファンタジーみたいなもんを持つてると？ 何の冗談だ？

「いや、どちらか一つ持つてただけでもレアなのに、まさかその両方を持つてるなんてね」

シトの言い方からすると、俺以外にも持つている奴はいるのだろう。

しかしそんなことはどうでもよかった。

「いや待て！ なんだその加護と呪いって……いつからそんなのがあった？」

「あれえ〜？ 薄々感付いてると思ってたんだけどな？」

シトはいやらしい笑みをこちらへ向けた。

「小さい頃からトラブル続きの毎日……にもかかわらず、重傷は負えど死ぬことはなかった」

シトはまるで俺の人生を見てきたかのように語る。いや、実際見てきたのだろう。俺は黙ってシトの言葉に耳を傾ける。

「そう、君のそれは『必ず死ぬ』という『悪魔の呪い』を受けて毎日トラブルに巻き込まれ、時に死にそうになりながらも、『寿命以外の死を必ず回避する』という『神の加護』で死ぬこと自体を回避していたんだ。そして何十回も何百回も生と死を行き来したことで、君は世界の誰よりも強い肉体を手に入れた。なんとなくわかってただろ？ 自分が周りに比べて異常な成長をしていたのを」

シトが何を言ってるか、全く理解できない……わけではなかった。

たしかに今まで俺がしてきた経験は、ただの偶然で片付けられるものではなかったからだ。

学校だろうとどこだろうと、どんなに大きな事件が起きても他の奴らは無事で、俺だけが必ず怪我を負っていた。

そして生き残る度に、身体が強固なものになっていくのも確実に感じていた。鍛錬では感じることもない着実な成長を。

「どっかでありそうだな設定だな」

「そのうち髪が逆立ったり、金髪になったりしてね、それとさっきのもう一つの質問に関しては、心配いらないよ。お爺さんが皆に話してくれると思うし、君の両親もすぐに納得すると思うよ」

なんで爺さんがここで出てくるんだ？

しかもこんな突拍子もない話を信じるのか、うちの両親は？

「実は前にも彼らを誘ってるんだけど、断られちゃって。『僕には可愛い孫がいるから行かん！ だがもしその孫が行くことになったら頼んだぞ』ってね、君の両親も、世界一であるお爺さんほどではないにせよ強いからって誘ってみたけど、同じような答えだったな」

「ああ、そういえば爺さんが世界一だったな」

それに小鳥遊家は武術一家として有名で、シトの言う通り、俺の両親もそれなりの実力がある。

こいつが単純な強さで呼ぶ人間を選んでいるのなら、爺さんや両親もすでに勧誘を受けていたということだ。そりゃ、こんな話も信じるわな。

「そゆこと！ だからもし君が行くことにしてくれば、お爺さんに言伝くらいなら届けてあげられるから。どうか来てくださいお願いします！」

そう言ってシトは膝を突き、頭を地面に付けて平伏した。

……神様に土下座された。

「神が土下座って……なんでそこまで？」

「だって今のところ全員に断られてるんだよ!? 過去を含めれば何百、何千って人たちに! しかもその大半に、何かの宗教の勧誘だとか頭のおかしい子供って言われて……そろそろ心が折れそうなんだよおおお!!」

シトは泣きながらそう叫び、地面に手と膝を突いて心情を語った。

普通はそうなるわな。

「そうか。ちなみにお前の世界と俺のいた世界の行き来は?」

「現状では不可能、残念ながら」

しかしすぐに立ち上がり、俺の質問にケロッとした顔で答える。せわしないな。

「別に異世界へ行っても魔王討伐とか使命じみたものはないから、自由にしていよいよ。世界を行き来する魔法を開発するのを目的に行ってもいいしね。できるかどうかはともかく」

「ずいぶん簡単に言ってくれるな」

「まあね。だって他人事だもん♪」

……ぶん殴ってやるうかコイツ。

「同情したわけじゃないが……行ってもいいか。なんだかんだで違う世界ってだけでワクワクするし」

「やったね! それじゃあ、いくつか特典をあげるよ!」

「特典?」

「そう。まず一つ、君の呪いを解除してあげる」

マジか! これでトラブル続きだった人生とはオサラバできるのか!?

あまり顔に出さないようにしていたが、俺の心は躍り始めていた。

「あ、変に期待してるとこ悪いんだけど……完治はしないんだ」

……なんですと? 散々期待させといて治らない?

「流石に十八年も悪い呪いだとか全部は無理だね。多少は残ることになるんだ。加護なら簡単に外せるのにな」

「それってどうなるんだ?」

「そうだね、死にはしないけどちよつとしたトラブルには巻き込まれる、って感じかな?」

俺がそんなもんだと妥協すると、シトは言葉が続ける。

「次は魔法! 僕の世界ではこれが主流だからね」

「魔法か。いきなりファンタジー感が出てきたな」

シトが小さく「僕が神様っていうのは?」と呟いたが、それはスルーする。

シトは軽く溜息を吐いたが、気を取り直したように続けた。

「君の魔法適性を全部MAXにする。これが二つ目」

「MAX? チートってやつか……いくらなんでもズル過ぎやしないか?」

「いいんだよ。僕の世界に頼る者がいない君にとつては、この力が全てになるだろうしね！」

頼れるのは力が全て、か……間違えれば魔王ルートだな。

「さて、あげるものもあげたし、そろそろ向こうに送るよ」

シトが俺に向けて手をかざすと、俺の足下から模様もようが浮き上がり光る。

魔法陣ってやつか。ファンタジーっぽい演出に、自然とニヤけてしまうのが自分でわかる。

「ああ、爺さんにはちゃんと言っといてくれよ？」

足下の光が徐々に強さを増していく。

その中でシトは何かを思い出したような顔をした。

「ああ、そうだ。君には——」

何か口にしかけていたが、それが俺に届くことはなかった。

眩しい光は数十秒ほど続き、ようやく視界が開けた場所へ出た……はいいが、そこは何もない荒野だった。

「……何もないじゃんか」

もう一度周囲を確認する。

あるのは砂、岩、動物っぽい何かの骨。

そしてとりあえず叫ぶ。

「何もないじゃんかよおおお!!」

叫んだ声は何もない荒野へと消えていった。

せめて街とかに飛ばしてくれよ。見渡す限りの荒野って……これどこに行けばいいんだよ？

途方に暮れていると遠くから、悲鳴のようなものが微かすかに聞こえた。

第2話 遭遇そうごう

俺は走り出し、その悲鳴の聞こえた方角へ向かう。

悲鳴が上がるのは、人がいるということ。人に会えばこの世界の情報が得られるはず……！

しばらく走ると、フードを被かつた子供と、刃物を手にそれを追い回す男が三人いた。

街の中であれば子供が何かやらかしたと考えるが、こんな何もないところで大人が子供を追い回す理由は少ない……となれば浮かび上がるのは、理不りふ尽な暴力の可能性。

「……………」

すると考え事をしてる俺に子供が気付く、こちらへ向かって走って来た。そして俺の後ろに隠れるようにしがみ付く。

「た、助けてっ!」

小さく掠れた声。その高さからして、女とわかった。

しかし……不用心過ぎる。俺がこいつらの仲間だと思わないのか？

あるいはそれだけ、気にする余裕がなかったのか。

そんなことを考えている間に、少女を追い回していた男たちが俺の目の前に立ち塞がった。

「おい、ガキ……後ろに隠した小娘をこっちに寄越せ!」

一人の男が持っている刃物をチラつかせ脅してきた。

他の二人の内、片方はたっぷりと脂肪を蓄えたぶよぶよの体。もう片方は骨が見えるくらいにガリガリの体。

漫画にありそうな組み合わせだ。というか、ガキって俺のことか？

観察をしていて返事をしなかったのに苛ついたのか、男は刃物をさらに突き出してきた。

「おい、無視してんじゃねえ! 殺されてえのか!」

……あまり大声を出されると頭が痛くなる。

まあ、これ以上騒がれても嫌だし……しようがない、答えてやるか。

「ガキガキうるせえな……大の大人がそのガキ相手に寄ってたかって何してやる? 発情でもしてるんならテメエで発散してろ。それともこのガキが趣味なのか?」

しまった。いつもの癖で挑発してしまった。

チラッと男たちの様子を窺う。

「何……だと? てめえ、ちよつとでけえだけのクソガキが偉そうに……!」

リーダーっぽい男が予想通りにキレて、プルプルと肩を震わせる。

他二人も、刃物を持つ手に力加わるのがわかる。

今更弁解したところで意味もないだろう。

……うん、この後の展開も大体読めたことだし、先手必勝ってことで先に手を出しとくか。

さっさと片付けて、この子供から情報を聞き出そう。

決心したところで、早速攻撃を仕掛ける。

構えを取らない状態から、チンピラたちそれぞれの顔に素早く拳を一発ずつお見舞いした。

そして体勢を崩したところにもう一発——と思ったところですぐに違和感を抱いた。

「ん?」

思わず声が出てしまう。

今の今まで目の前にいたチンピラトリオが消えていたのだ。

その代わりに、遠くで宙を舞っている人影が三つ。

おいおいおい……気絶とかならまだ「弱いな」で終わるが、人間がこんな漫画みたいな飛び方をするなんてありえない。

しかも太った奴、あいつ200キロぐらいありそうだったよな？

「え……？」

少女らしき子供が声を漏らしたことで、俺は我に返る。

おっと、コイツのことを忘れていた。今を見ていたら怖がって逃げたかもしれないが、それだけは回避せねば……！

「今のは？」

フード越したが、少女がボカンとしていたのがわかった。

しかし動揺はしているものの、何が起きたかまではわかっていないらしい。どうやら完全には見ていなかったみたいだ。

ではどう誤魔化すか。

「……マホーだよ」

苦し紛れに言い放ってしまった。これが本当の魔法の言葉、ってね。

だがいくらチート化した魔法適性を持っているからといって、この世界の住人である少女に「あんな魔法あるわけない」と言われたらぐうの音も出ない。

かといって適当に「軽く殴っただけ」なんて言ったら、絶対に化け物扱いされるに決まってる。

そして少女の口がゆっくりと開く。

「凄いい、こんな魔法があったなんて……」

よしっ！ 世界にはまだまだ知らない魔法があるよ的な感じで回避成功！

やはり時代は魔法（物理）だ！

「ところでなんであいつらに追われてたんだ？ そこら辺に転がってそんなチンピラだったか」

とりあえず素朴な疑問をぶつけてみる。

どこかの街に案内してもらおう前に、少しでも打ち解けて現状の把握と、この世界のことを知っておきたいからな。

「……」

俺の言葉に、少女は俯いて黙りこくってしまう。

あれ……交渉する前に失敗？ なんか地雷でも踏んだ？

俺の不安を他所に少女が口を開いた。

「あの人たちは、私を奴隷商とれいしょうに売ろうとした。高く売れるから」
「ええ……」

予想以上に重い話だった。

人間が人間を捕まえて奴隷にする。変な奴らもいるし街とか見えないし……世紀末かよ、ここは？

「……あなたは？ 見たことない服を着てるけど」

まるで変人を見るような目でこちらを見てきた。ちよつと傷付く。

「俺のセンスは放っておいてくれ。知り合いに置いて行かれてね。途方とほうに暮れてたところだ」

置いて行かれたというより飛ばされたのだが。

「こんな場所に置き去り？ ずいぶん酷いことする人。ここは危険な動物や魔物がそこら中にいるのに」

アツハツハツハツハ！ 次に会うことがあつたら絶対ぶん殴つてやるぞ、シト。

なんで街に送らずそんな危険なここに放り出してんの!?

「……ま、そういうことだから近くの街まで案内してくれないか？」

「……」

やっぱりまだ警戒しているのか？

当たり前か。襲われたばかりでこんな会ったばかりの男を信じる方がおかしい……

「いいよ。その代わり、あなたに私の用心棒まうしんぼうをしてほしい」

つてあれ？ 話がおかしな方向に……？

俺としては案内してもらつたらサヨナラするつもりでいたんだが……

「いいのか？ 出会ったばかりの奴にそんなことを頼んで。あいつらの仲間か、それじゃなくても同じ目的を持つてるかもしれねえのに」

「あなたから悪い感じはしない」

少女は「私の勘かん、よく当たる」とポソツと付け加えて頷うなずき、俺の手を取り銀色のコインを渡してきた。

「これは？」

「前金。数日毎ごとにあなたに払う」

どうやらこれがこの世界の通貨らしい。

やっぱり漫画みたいに金銀銅の通貨なのかね……つていうかこのコインに彫ほつてある爺さん誰だ？

「旅に金は必要だから、ありがたく承諾しょうたくさせてもらうよ」

「旅？ 帰らなくていいの？」

「勘当かんとされたようなもんでね。これを機に世界旅行なんてのも楽しそうだなと思つてな」

「……それに付いてっつても？」

「お前がか？」

少女は「ん」と頷く。俺はいいが……

「お前の方こそいいのか？ 俺は目的もなくダラダラ旅をするだけなのに」

「私も目的なく旅をしているようなもの。だから丁度いい」

「そうか、なら——」

スッと手にした銀貨を突き返す。

「……何？」

「旅と一緒にするなら、『用心棒』じゃなくて『仲間』だろ？ ならこの金は返す」

目の辺りまでフードを被っているから中の表情は読み取り難いが、少女が驚きと喜びの表情を浮かべたのはわかった。

「仲間……」

「嬉しそうだな？」

「うん、嬉しい」

すると少女はフードを取り、素顔を見せてくれた。

黒髪に赤く獣のような瞳孔をした目、褐色の肌、そして何より獣の耳と尻尾を付けている。耳はピクピクと動き、尻尾はゆっくり揺れていて、本物だとわかる。



よく友人がやっていたゲームに、こんな種族がいた気がした。たしか獣人^{ビースト}だったか。本当に異世界に来たんだなあという実感が湧^わいてきた。

「……どうしたの？ 私の顔ジツと見て」

「ん？ ああいや、可愛い顔してんなど」

「ッ!?」

可愛いと言われたのが恥^はずかしかったのか、少女の顔が一瞬で赤くなった。

「リアル猫耳少女なんて見たことなかったもんでね」

少女は再びフードを深めに被^かつて俯^{うつ}いてしまったが、その姿もまた可愛らしい。

……ところで、俺はいつまで銀貨を差し出したままにしていればいいんだ？

少しして、街を目指して二人で歩き始める。

少女に返そうとした銀貨は、俺が無一文^{いちもん}だということを知ると、そのままくれた。

これがどれだけの価値なのかはまだわからないので、大切に取っておこう……中学生くらいの女の子に高校生^{こうせいせい}の男が金を貰^{もら}って使うという情けない事実には、目をつむることにする。

とりあえず俺は女の子に付いて行くことにした。

「そういえば、まだお互い名乗ってなかったな。俺は綾人だ」

友人の薦^{すす}めるゲームやアニメを見てみると、異世界では上の名前がないパターンが多いので、とりあえず下の名前だけ名乗ることにしてみた。

「私はミーナ。よろしく」

ミーナと名乗った少女は、とにかく言葉が少ない。

伝わることはちゃんと伝わっているので今のところ問題ないが……そういう性格なのだろうか？

「ところで」

すると突然、ミーナが切り出す。

「さっきのあなたの魔法、珍しい。何の属性なの？」

さっきの魔法、つまり俺があいつらをぶっ飛ばしたアレだ。

誤魔化^{ごまか}したと思ったが、まだ疑^{うたが}われているようだ。

属性とかそこら辺は考えてなかったし、なんて答えるか……

「あれは……そう、最近偶然^{くうぜん}使えるようになったんだ。それまで魔法を使ったことがなくてね」

「へえ」

ミーナは興味なさそうに返事をした。

いや、これは興味なさそうというより嘘^{うそ}と見抜^ぬかれてるような……？

「あなたの年齢は？」

「十八だ」

「そう。私と同じ」

マジか。

見た目が中学生くらいだから十四、五歳かと思ったが、まさか同じ年とは。

「その年まで魔法を使つてなかったの？」

「期待されてなかったみたいだな」

「つまり適性がない？ それが勘当された理由……？」

適性は全MAXにしてもらったけど……うん、勘当された理由それでいいや。

「そゆこと。だけど魔法はともかく腕力には自信あるから、用心棒としても期待してくれ
ていい」

「大丈夫。私も魔法は支援程度に使える。私たちは仲間」

なんとなく微笑んでるように見える。

仲間って言葉がそんなに気に入ったのか？

「それにしても不思議」

「何がだ？」

「私の姿を見ても興味ありそうな目はするけどそれだけ。他の人たちとは違う。ゲスな目

で見えてこない」

「それは俺が世間知らずだからじゃないか？」

「……いいとこの坊ちゃん？」

「そんなところろだな。だけどそういう家庭に生まれただけで、優遇はされなかったな」

なんとなく、生まれてからこれまでのことを思い出す。

恵まれた境遇かと聞かれれば、今までの不幸を思い出してしまい領けなくなる。

そんな俺の心境を察したのか、ミーナの表情が曇った。

「……ごめんなさい」

いやいや、こちらこそごめんね？ 今のは違うこと思い出してただけだから！

「気にしなくていいよ。むしろ今は何も気兼ねしなくてよくなったからラッキー程度に
思ってるしな」

「フフッ、本当に不思議ね、あなた」

そう言つてミーナは笑みを零し、なんとか場が和んだ。

あ、そうだ。せっかく一緒に行動するなら、今のうちに魔法のことを聞いておくか。

世間知らずの坊ちゃんと認識されたのは都合がいい。

「なあ、ミーナ——」

——ドゴンッ！

俺の言葉を遮るよういきなり目の前が爆発し、砂煙が上がると、デカイナニカが出現した。

「ッ！ これって……!?」

ミーナが驚いたように呟く。

よく見ると、高層ビル並みの高さを持つミミズの化け物だった。

あれ、神様？ たしか呪い解除してくれたはずだよ。なんで異世界飛ばされて早速こんなトラブル二連発なの？ むしろ向こうにいた時より頻度高くなつてないか!?

二度目のトラブル発生に、思わず頭の中でツッコンでしよう。

そんな俺の届くはずのない疑問を他所に、化け物が動き出した。

「ゲゲアアアアア!!」

ミミズの化け物が耳障りな咆哮を放つ。

すると頭らしき先端部分がクパアと開き、中に無数のトゲが確認できた。おそらくあれは口だ。

厄介な相手だと一目でわかる。しかし同時に、今までにない高揚感が湧き上がってきた。

「逃げて。あれは相手にしちゃいけない化け物。私が時間を稼ぐ。だからあなたは——」

ミーナが何か言葉を口にしたが、それを聞くことなく俺は走り出していた。あの化け物に向かつて。

最初は身体を鍛えるために鍛錬をしていた。その修業の時でさえ何度も死にかけていた。だが、慣れてきたせいとか、いつしか物足りなくなっていた。

一つ一つに怯えていた日々から、いつの間にか自分を脅かす存在を切望するようになった。

それがいつだったかは思い出せない。

そして目の前の魔物は、強弱がわからない。

そう、わからないのだ。「未知数」。

その言葉にワクワクした。

爺さんと各地を回った時でさえ味わうことなかった感覚。

この世界には「魔法」や「魔物」、未知なるものが多く存在する。

そうだ、まだ俺はこの世界のことを何も知らない。

だから期待する。まずは目の前の敵に。

ミーナが後ろで何か叫んだが、俺にはもう聞こえない。足が止まらない。

まるで子供が、アトラクションが沢山ある遊園地に初めて連れて行かれた時のように。

そして俺はそのまま足に力を入れ、軽やかに跳躍した。

第3話 街へ

非常に残念だ。

殴り飛ばした魔物は、すでに動かなくなっている。

地球にいるミミズと違って鉄のように硬い皮膚をしていたが、それだけだった。

一発KO。

死んではいけないのだが、瀕死の状態だ。

「硬いだけで耐久性がない……実は雑魚の類か？」

いや、違う。それだけじゃない。

男たちを殴った時といい、今の跳躍といい、この世界に来てから違和感があった。

まるで体が軽くなったような。今も魔物の腹辺りを目標に軽く跳んだはずだったのに、

顔面つぼい先端部分、つまりは高層ビルの屋上くらいまで跳んでしまっていた。

俺の体が強化されている？ それともこの世界のものが脆いのか？

手を顎に当ててそんな考察をしながらミミズの魔物を観察していると、後ろからミーナ

が焦りながら走って来て、魔物の前で立ち止まる。

「……」

気絶した巨大な魔物を見上げて絶句していた。ありえないものを見るかのように、俺と

魔物を交互に見つづ。

「ど、どうした？」

「あ、あ、あ……」

「あ？」

「ありえない……」

なんとも言えない、こう……驚きや悲しみなど色々な感情が押し寄せて、どんな顔をし

ていいかわからないといった感じの表情だった。

どうやらこのミミズはかなりの強さだったらしい。それを一撃で倒してしまったのだから

「ありえない」んだろう。

そうか……やってしまったか。早速年貢の納め時らしい。

しばらくして、落ち着いたミーナから問い詰められた。

「『坊ちゃん』が嘘なのは知ってた。でもあれは普通一人では倒せない魔物。あなたは

「何」？」

俺が神と会った時に言ったのと、まるで同じセリフを問われた。人とは違う別の何かと

判断されたようだ。

だがミーナは俺に怯えているわけではなさそうだし、悪意もないようなので正直に話すことにした。

しかしその前に一つ。

「なあ、ミーナの質問に答える前に聞いていいか？」

「何？」

「この世界に、異世界から人が召喚しょうかんされたりすることはあるか？」

「異世界から？ 幻獣げんじゅうならある。でも人はない」

「そうか。なら俺が初めてつてことだな」

「……つまり？」

「俺は違う世界から召喚された」

ミーナは今までで一番の驚いた表情をしていた。だがすぐに落ち着いた様子を見せ、次の質問に移った。

「召喚主は？」

「召喚主？」

「さっき呼ばれたって言った。誰に？」

「……これ言つて大丈夫か？」

「いやまあ、ここで嘔吐しても意味ないんだけど。」

「シトつて奴だ。あいつは神を自称してたが……」

「……は？」

うぐっ……その「は？」は今までで一番心に刺さるっ！

「神様？ 本当に？」

「……多分」

「正気？」

再び俺のガラスのハートが砕け散りそうになった。

「本気？」ではなく「正気？」と言われるとかなりくる。

たしかに「私が神です！」とか「私は神から送られた使者なのです！」とか言う奴がいたら、俺だって正気を疑うもんなあ……そりゃそうか。

どうしよう。

これで変人扱いされたら、異世界来て早々に俺の精神が崩壊ほうかいするぞ！

そしてしばらくの沈黙の後、ミーナ様の審判しんぱんが下される。

「少し納得した」

「……え？」

自分でも驚くほどの抜けた声を俺は出していた。

「信じるのか？」

「ん」

「ずいぶん簡単に信じるんだな」

「私は人のちよつとした感情とか読み取るの得意。言ってなかった？」

「初めて聞いた」

「じゃあ、今言った」

「そういえば出会った時、悪い感じがどうか言ってたな。」

「ん？　ということとは……？」

「もしかして俺が嘘を吐いてたことも？」

「ん。バレバレ」

「マジか……」

「ミーナが無い胸を張ってドヤ顔をした。」

「……今、何かちよつとイラッとした」

「何の事だかな」

「こいつ、実は覚おぼとかいう相手の心を読む妖怪じゃないだろうな？」

「アヤト、まだ余裕ある？」

「余裕？　力が余ってるかってことか？」

「ん。できればこの魔物にトドメを刺すのと、素材を剥はぐのを手伝ってほしい」

立ち読みサンプル はここまで

魔物の素材……と言ったらやっぱり、狩りのゲームみたいに武器や防具にするための材料になるか、もしくはこの魔物がそれほど強いのだとしたら換かえ金属材料になる。まあ、あくまでゲーム知識だから当てにならないけれど。

「はいよ」

「ミーナはトドメを刺すべく、脳と同化しているという心臓部に、手持ちの剣を突き刺そうとする。」

しかしその剣は刃こぼれがひどいせいで全く歯が立たず、交代した俺おれが貫手ぬきてで思いつく切りそこを貫いてやった。

そして何か小さく硬い物を砕いた感かん触ふが伝わるのと同時に、ミミズの魔物が一瞬大きく飛び跳ねて再び沈黙する。

「……すい」

「これでこいつはもう死んだってことでもいいのか？」

「驚愕きょうがくしてるミーナに聞くと、戸惑いながらも頷いた。」

「ずいぶん簡単に死ぬのな」

「普通こんなあっさりいかない。私の剣だつて刺さらなかったくらいだし。それに、個体によって心臓の場所が違う。だからもし、やつと貫いた場所に心臓がなかったら、再生されて最初からやりなおし」